

37年前に独立国をつくったプリンス・レナード。
公国内にある自らの像とともに。

another
eye



その男は土地と家族を守るために独立国をつくった。

オーストラリア

「ハット・リバー公国」訪問記

国とはいったい何だろう？

オーストラリア大陸にあるこの国を訪れると、
改めて考えざるを得なくなる。

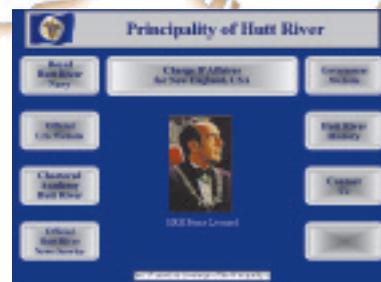
37年前、一人の農夫がオーストラリア連邦政府に対して独立を宣言し、
自身が所有する土地を「ハット・リバー公国」と名づけた。

国民は自分の家族と農場の使用人だけ。

その国には独自の通貨があり、切手やパスポートも発行している。

西オーストラリア州にある、その小さな国を訪れた。

● ハット・リバー公国



ハット・リバー公国 Hutt River Province Principality
<http://www.huttriver.net/>

オーストラリアとハット・リバー公国の国境。
小さな看板が立っているだけ。



ハット・リバー公国「中心部」のゲート。この内側にこの国のほとんどの機能がある。

広大な荒地の中に現れた「国境」

大陸西部を荒野で埋め尽くす西オーストラリア州の海岸沿いに、ジェラルトンという町がある。その町から荒野の中を北へ100キロほど走ると、ひとつの標識が見えてくる。黄金色の枯れ草と赤土の中にぽつりと立つ、その小さな立て札には、こう書かれている。

「BORDER HUTT RIVER PROVINCE」

ここが国境だ。この向こうはオーストラリアではなく、「ハット・リバー公国」という名の別の国になるのだ。そこから30分ほども走っただろうか。今度は、私有地の入り口のような小さな赤レンガの壁、さらにその向こうに、“Government Offices” “Post Office”と書かれた同じく赤レンガの建物が見えてきた。

乗ってきたバンを停めてうろうろしていると、一人の老人が近づいてきた。くたびれたシャツと穿き古したズボンをまとった普通の老人。にこやかに声をかけてきたその人物こそが、プリンス・レナード、すなわちこの国の統治者だった。

本名レナード・キャスリー。1925年、オーストラリア生まれ。そんな一人の老人が、どういう経緯で「プリンス」レナードとなるに至ったのか。それには30年以上も話をさかのぼらなければならない。

権利を守る手段としての「独立」

事の始まりは、1969年に西オーストラリア州政府によって提示された小麦販売量割り当て政策である。当時、小麦農家として暮らしていたレナード・キャスリーは、その年の10月、自分たちに与えられたあまりに少ない割り当て量を見て驚愕した。とても生活をしていける量ではなく、「何かの間違いなのではないか」と西オーストラリア州政府に不当性を訴え、抗議の手紙を書いた。

が、抗議は届かなかった。一方、州議会でも州政府に地方の土地を取り返す権利を与える法案が通過しそうだったため、このまま抗議をしているだけでは土地まで取り上げられかねないという危機感を覚えた。どうした

ものかと悩んだ結果、彼が思いついた方法が「分離独立」だった。彼は法律に明るかった。

「国際法によれば、自らの経済または土地が奪われる

訪問を歓迎してくれたプリンス・レナード。国旗、マント、ユーモラスだ。



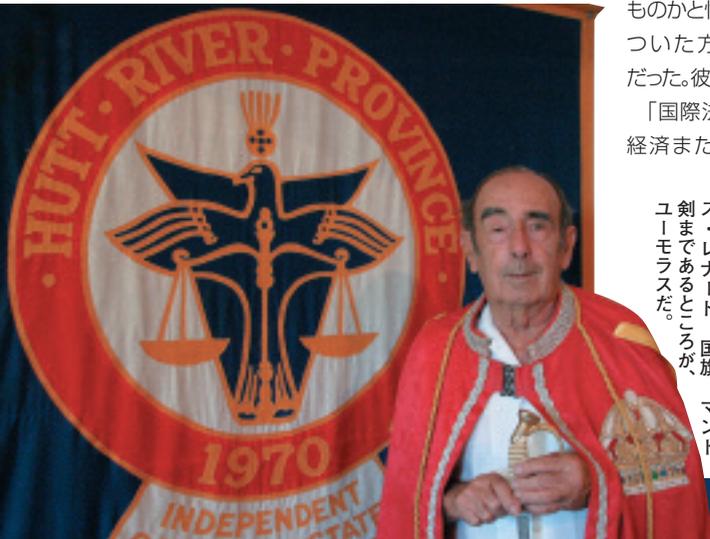
独立30周年を迎えた2000年に書かれたオーストラリアの週刊誌記事。プリンス・レナードの「偉業」について好意的に書かれている。

危機に瀕している場合、自らを守るために政府を作り、分離独立することができる。私たちは経済と土地の両方が危機にあったんだ」

彼はいいよよ、「割り当て量の修正または相当なる補償がなされない場合は、自分たちの土地を西オーストラリア州の管轄権から撤退させ、西オーストラリア州およびオーストラリア連邦政府からの独立を宣言する」といった旨の文書を州政府に通知した。そして翌、70年3月の時点でも政府からの返事はなかったため、ついにレナードは分離独立へと踏み切ったのだ。

彼が実際に取った行動とは何だったのか。それは、西オーストラリア州政府とオーストラリア連邦政府へ、“Fait Accompli”（「既成事実」）と題された分離宣言の公式文書を送ることだった。

それに対して各政府の反応は、実に簡単だった。連邦政府は「それは西オーストラリア州憲法にかかわることで、連邦政府は関与できない」と説明し、州政府は「われわれはあなたの行動に対して何も行動を取る気は



ハット・リバー公国の通貨（1ハット・リバドル＝1豪ドル）。



プリンス・レナードの執務室内で。



政府の機関である Department of Territories が、ハット・リバー公国の法的正当性を認めた文書。「1、ハット・リバー公国は合法的な存在である。2、当公国のプリンス・レナードは現在のオーストラリア税制からは除外される」などと書かれている。



実際に使っているパスポート

ない」と返答したのだ。もちろん、各政府は独立を認めたのではない。誰もがこのような形で合法的に分離独立することなど不可能だと考えて、相手にしなかっただけなのだ。

法的な正当性を持つ国となる

事実上、それだけだった。その後、レナードは徐々に国としての形を整え始めた。行政委員会を立ち上げ、国旗も作った。他国が新政府を作るときと同様に、分離独立前との継続性を保ちながら、新政権への移行にあたって必要な法律だけを作り、それに基づいて、新しい憲法、法律に移行していった。

また、イギリスの女王との関係で反逆罪に訴えられることがないように、レナードは自ら「プリンス」となり、そこにプリンス・レナードの治める国土 75 km²の「ハット・リバー公国」が誕生した。その後、諸政府機関だけでなく、切手、通貨、パスポート、形式上の軍隊までを作るに至ったのだ。

半ば冗談のような話であるが、しかし彼の地位は法的に有効であることが認められている。独立宣言後、たびたびオーストラリア連邦政府との間で税金などについて議論がなされたが、ある政府機関の内部文書に「ハット・リバー公国は法的に有効な存在であり、プリンス・レナードはオーストラリアの税制から除外され、また公国のパスポートも有効である」との旨がはっきりと書かれている。

つまりオーストラリア連邦政府は、「ハット・リバー公国」を公式には認めていないものの、法的には認めざるを得なくなったのだ(実際プリンス・レナードは、オーストラリアの税制からは除外されている)。また彼は、ハット・リバー公国のパスポートで、実際に外国へも訪れているという。

プリンス・レナードという生き方

プリンス・レナードは、その行動力通りのエネルギーで魅力的な老人だった。

彼がここまで大胆な行動に打って出ることができた理由は、ただ政府への反発という感情だけでは決して説明できない。そこにユニークな人間性があることはいうまでもない。

1925年にオーストラリアで生まれ、広大なこの国を転々とし、壮大な自然と対峙する中で、レナードの旺盛な好奇心は芽を出した。家計を助けるために14歳で就学を終えたが、その後も働きながら会計士を目指して勉強を続け、独学で数学や物理学も学んできた。そんな多方面への探求心が法律へと向いたのは16歳のときだった。

「工作中的の空いた時間に事務所にあった法律書を読んでいたんだ。とにかく面白かった」

それは勤めていた運送関連会社での業務にも役立つとともに、それ以上の知識を彼に蓄えさせた。オーストラリアというまだ新しい国の中に、さらに新しいひとつの国を築き上げる力を与えたのだ。

目的は間違いなく自らの生活と土地を守ることだった。だが、独立から30年以上経った今では、国を統治するという業務自体が彼の飽くなき好奇心を満たす手段となっているようにも見えた。

「国を治めるのなんて難しいことではないさ。人生で最も大切なのは、楽しむことだ」

これまで何度となく繰り返し、言い慣れた

滑らかさが彼の口調からは感じられたが、彼の生き様を見れば、そこには十分すぎるほどの説得力があった。

独立30周年を迎えた2000年に発行された、オーストラリアの週刊誌の記事によれば、ハット・リバー公国に対して無視を決め込んでいるらしいオーストラリア連邦政府に対して、プリンス・レナードの4人の息子の一人、クラウン・プリンス・イアンがこう語っている。

「父が亡くなればこの国も自然消滅するだろうと考えているのかもしれないが、そうはいかない。父の意志は私たちが受け継ぎますよ」

この国が、今後どのような歴史を築いていくのか楽しみである。

ハット・リバー公国を訪れて、国という概念が極めて曖昧なものだということを感じ知らされた。たとえば「なぜ日本は独立国と言えるのか」と考えると、それは国際社会の誰もがそう認めるからだ、としか答えようがない。認めるか、認めないか。結局、国なんてそれぐらいのものでしかないのではないだろうか？

しかし、プリンス・レナードにとって、そんなことは当たり前なのかもしれない。

——だって、そうじゃないか。ぼくらが生きてる社会は、すべてぼくら人間が作り出しただけのもんなんだから。絶対のものなんて何もないのさ——そんな声が聞こえてきそうだ。

Text by : コンドウ ユウキ



政府事務局が置かれる建物。事実上、政府の機関はここのみ。



公国内にある建物はわずか。